

インドネシアの中等教育における 日本語教師研修インストラクターの養成

—教育文化省語学教員研修所と高校日本語教師の連携による
研修の自立化を目指して—

Evi Lusiana・尾崎裕子・秋山佳世

〔キーワード〕教師研修、研修の自立化、教師研修指導者の養成、教師の成長、指導者間の連携

〔要 旨〕

インドネシアでは近年中等教育段階（主に高校）の日本語学習者が急増し、高校日本語教師の研修の重要性が増している。国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（以下、「JFJ」）は、インドネシアの教育文化省語学教員研修所（以下、「P4TK Bahasa」）と共催で教師研修を実施してきたが、従来、教師研修の講師は主に JFJ の専任講師や専門家と現職高校日本語教師のインストラクターが務め、P4TK Bahasa の講師はほとんど授業に関わっていなかった。しかし、インドネシアの中等教育における日本語教育の自立化実現のためには、P4TK Bahasa の講師が高校日本語教師のインストラクターと連携して教師研修を実施できることが望ましい。そこで、2011年、P4TK Bahasa の講師を対象に、教師研修で教授法を指導するための実践的な力の習得を目指した研修を実施した。本稿ではその概要と評価、意義について報告する。

1. はじめに

インドネシアでは近年中等教育段階（主に高校）の日本語学習者が急増し、高校日本語教師の研修の重要性が増している。国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（以下、「JFJ」）は、インドネシアの教育文化省語学教員研修所（以下、「P4TK Bahasa」）と共催で、1988年から基礎研修・継続研修・中級研修の3段階の日本語教師研修を実施してきた（Drs. Sudjianto・小林2004）。

日本語教師研修の講師は、2010年まで主に JFJ の専任講師や日本語上級専門家・日本語専門家と中級研修を修了した現職高校日本語教師が務め、P4TK Bahasa の日本語研修担当講師はほとんど授業に関わっていなかった⁽¹⁾。しかし、日本語教師研修や日本語教育の自立化のためには P4TK Bahasa 講師のインストラクター能力の獲得が急務であることから、P4TK Bahasa 講師を対象に、基礎研修での教授法インストラクターとしての実践的な教授力習得を目指した「日本語教師研修インストラクター養成研修」を設計・実施した。

本稿では、その日本語教師研修インストラクター養成研修の設計・実施および評価について

報告する。評価については、同研修修了時点の評価に加え、同研修修了後、実際の基礎研修にインストラクターとして出講した P4TK Bahasa 講師に対して実施した追跡調査の結果についても合わせて報告する。

2. インドネシアでの中等教育における日本語教育支援

ここでは、インドネシアの中等教育において、これまで JFJ がどのような日本語教育支援を行ってきたかを概観する。なお、インドネシアの高校において日本語教師はインドネシア人だけである。JFJ はその現地のインドネシア人高校日本語教師に対して、主に、(1) 日本語教材の整備、(2) 各地域の高校日本語教師会支援、(3) インドネシア中学校・高等学校日本語教師会支援、(4) 高校日本語教師研修の開催、(5) 訪日研修への参加支援、などを行ってきた。

まず、(1) 日本語教材の整備として、JFJ は、これまで国家カリキュラムの改訂に合わせて、インドネシアの教育文化省と協力して、インドネシアのカリキュラムに準拠した3種類の日本語教材を制作している。職業高校で観光関連分野を専攻する生徒のための『インドネシアへようこそ』(2005)、普通高校および宗教高校で必修科目として日本語を学ぶ生徒のための『にほんご』(2007)、普通高校・宗教高校・職業高校で必修選択科目や学校裁量科目として日本語を学ぶ生徒のための『さくら』(2009)、いずれの教科書も、インドネシア各地の現職日本語教師の協力を得て作られたものである。

また、インドネシアの日本語教育について特記すべきは、(2) 全国各地で州レベルや県・市レベルの「高校日本語教師会 (以下、「MGMP」)」が組織されていることである。教師会は、教授法などについての勉強会や小研修を実施したり、日本文化祭や日本語スピーチコンテストを開催したりするなど、教師や生徒に対して学びの機会や日本語を使う機会を提供している。同時に、地域の日本語教師が情報交換をし、交流を深めるネットワークとしての機能も果たしている。国際交流基金 (以下、「JFJ」) は、これまで、西スマトラ州、ジャカルタ首都圏地域、西ジャワ州、中部ジャワ州、東ジャワ州、バリ州、北スラウェシ州に中等教育支援担当の日本語専門家を派遣しており^②、日本語専門家は各地域の MGMP を牽引していく中核教師の育成や、その地域の先生方のその時々ニーズを汲んだ勉強会のサポートなどを通じて、教師の日本語力や制約に配慮し、望まれる活動のあり方を探りながら MGMP の自立化を支援してきた。

このような MGMP の自立化に向けた支援は徐々に実を結び、日本語教師会活動がインドネシア人教師により円滑かつ継続的に運営され、先輩教師が後輩教師を育てながら互いに学び合うという仕組みが定着・成熟してきた。しかし、広大な島嶼国家であるインドネシアにおいては、これらの教師会活動の自立度・成熟度や日本語教育関連の情報の得やすさなどには地域差も大きい。そこで、地域と地域をつなぐネットワークを形成し、各地域が抱える問題・課題や

情報を共有し、地域間格差を小さくしていく必要性から、(3) 中等教育における全国レベルの日本語教師会「インドネシア中学校・高等学校日本語教師会（以下、「AGBJI」）」が設立された（2007年）。AGBJI は JF のさくらネットワークの中核メンバーであり、2010年以降、毎年1回、各州の MGMP が持ち回りで実行委員会を組織し、全国レベルのワークショップを開催している。JFJ は、ワークショップ実施に関連する様々な後方支援を行っているが、活動の主体はあくまで各州・地域の MGMP と教師たちである。また、従来、ワークショップはインドネシア各州から代表の教師1名～数名が参加する形態を取っているが、これも、参加者がワークショップで学んだ内容を各自の地域で仲間の教師たちと共有することが前提とされている。つまり、AGBJI の活動の実施および情報共有においても、各州・地域の中核教師が重要な役割を果たしている。

上に述べたとおり、インドネシアの中等教育段階における日本語教師の学びやネットワークの維持・拡大の鍵となるのは、それぞれの地域を牽引する中核教師たちの存在である。その中核教師や将来的に各地域のリーダーとなる教師を育成し、教師同士のネットワークを形成する基盤とも言えるのが(4) 高校日本語教師研修であり、JFJ は、この高校日本語教師研修を P4TK Bahasa と共催している。高校日本語教師研修については、3章で後述する。また、MGMP などでの活躍が評価・期待される教師は、多くが(5) JF の訪日研修のプログラムに参加している。

3. インドネシアにおける高校日本語教師研修

次に、インドネシアにおける高校日本語教師研修がこれまでどのように実施されてきたのかを概観する。インドネシアにおける高校日本語教師研修の形態や内容は、その時々状況に合わせて変化しながら今日に至っている。ここでは、2011年までの教師研修の実施状況について述べる。

3.1 2011年までの高校日本語教師研修の枠組みと到達目標

JFJ と P4TK Bahasa が共催している高校日本語教師研修は、本来、「基礎研修→継続研修→中級研修→上級研修」という4段階の研修からなるものである（藤長・古川・エフィ2006）。しかし、2011年までに実施されたのは、基礎研修（毎年）、継続研修（2005年、2011年）、中級研修（2010年）の3段階であった。これらの教師研修は、各研修の成績優秀者で、地域の MGMP の活動などに積極的に参加している教師が次の段階の研修に進むことができるというシステムになっており、「中級研修」を優秀な成績で修了した教師は、「基礎研修」や「継続研修」にインストラクターとして出講することが期待されている。また、「継続研修」を優秀な成績で修了した教師には、各地域の MGMP が行う勉強会や小研修などにリーダーやサブ・リーダー

として積極的に関わることや「中級研修」への参加が期待されている。

各研修の内容は、JFJ が関わる「日本語演習」と「教授法演習」のほか、P4TK Bahasa による授業から成り、研修生数は20～30名であった。3段階の研修の枠組みと到達目標は、次の図1に示す。

3.2 日本語教師研修におけるインストラクターの役割と連携

ここで、教師研修のインストラクターの役割と連携について詳細を述べる前に、JFJ が研修を共催している P4TK Bahasa について説明する。

P4TK Bahasa は、首都ジャカルタにあり、教育文化省が管轄する教師研修機関として、全国の高校日本語教師の情報やニーズを収集・把握し、国の教育政策に基づいて必要性の高い研修を企画・運営・実施していく責務を担う機関である。主に高校の外国語教師に対する教師研修を実施しており、日本語以外にも各外国語について研修を担当する講師と講師候補を有している。講師候補として採用された者が講師になるためには、所定の試験を受けて合格しなければならない。（講師も講師候補もほぼ同様に研修に出講するため、本稿では、特に記載のない限り、どちらも「日本語研修担当講師」あるいは「講師」と呼ぶこととする。）つまり、P4TK Bahasa は、インドネシアにおける中等教育段階の日本語教育、特に教師研修を適切かつ効果的に行ううえで、非常に重要な役割を担った機関であると言える。

そこで、JFJ は、先に2章で述べたような高校日本語教師に対する支援のみならず、P4TK Bahasa に対しても、「教育省教育職員研修」を実施したり（2007年、2週間）、日本語研修担当講師を日本語国際センターでの訪日研修に招聘する（5名、のべ6回）などの支援を行ってきた。

だが、実際には2010年まで、日本語教師研修の講師は、JFJ の専任講師や日本語上級専門家・日本語専門家と、「中級研修」を修了した現職高校日本語教師のインストラクター（彼らは各地域の MGMP においても中核的な役割を果たしているため、本稿では、以下「MGMP インストラクター」と呼ぶ）が務め、P4TK Bahasa の日本語研修担当講師はほとんど授業に関わる事がなかった。

しかし、インドネシアの中等教育における日本語教師研修、そして日本語教育の自立化実現のためには、教師研修における P4TK Bahasa 講師の主体的な関わりが不可欠である。また、その際に強く期待されるのが、MGMP インストラクターとの連携である。

ただ、P4TK Bahasa 講師は、現職の高校日本語教師ではなく、教育現場での経験に乏しく、また MGMP への参加経験がある者も少ない。そのため、インドネシア各地の状況や、高校の教育現場の様子、効果的な教え方などについて十分に理解し実感するのは難しいというのが実情である。しかし、P4TK Bahasa 講師と MGMP インストラクターが連携・協働することによ

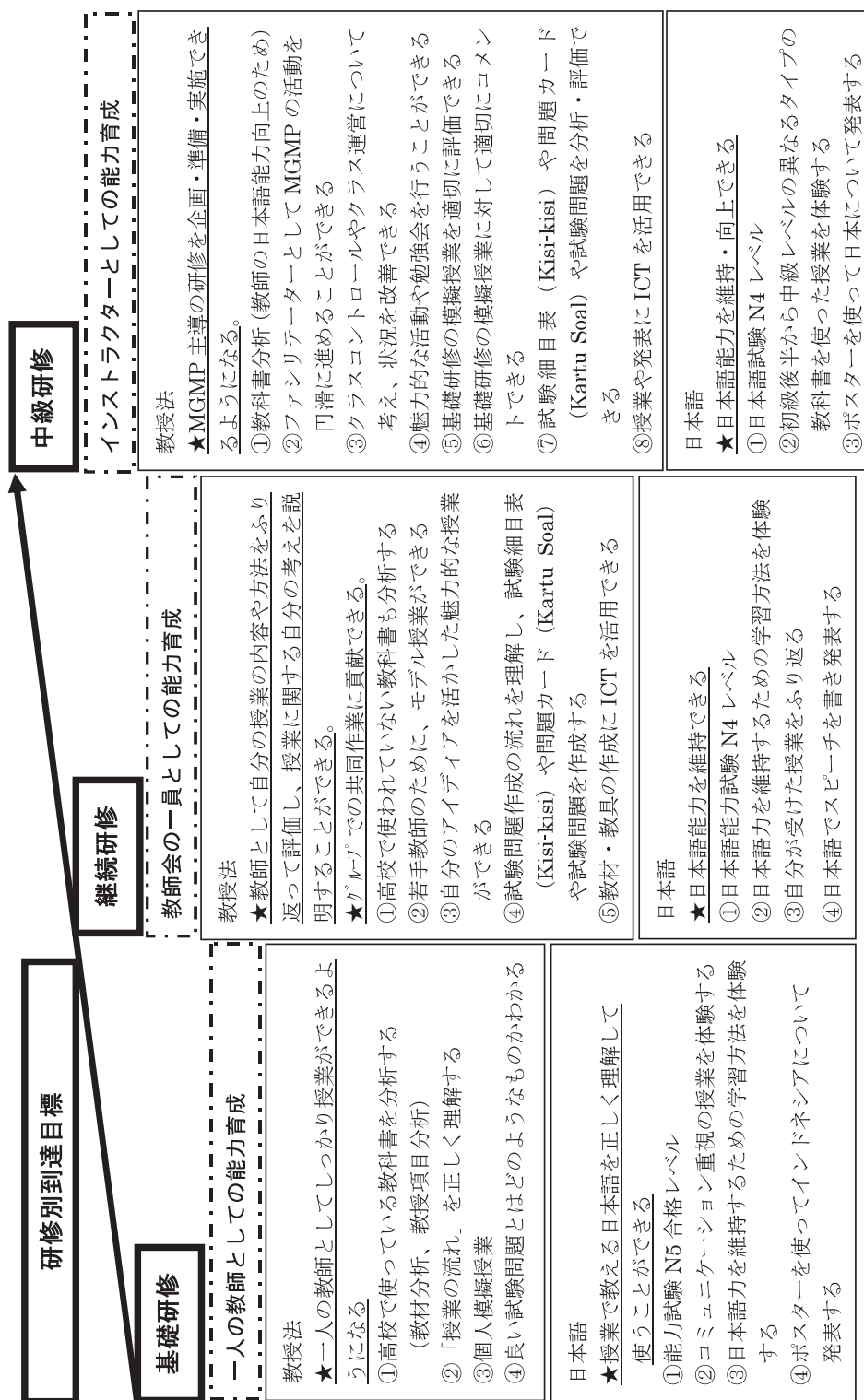


図 1 インドネシアにおける高校日本語教師研修の枠組みと到達目標
JFJ・P4TK Bahasa (2011)『研修用教授法教材 (日本語版)』

り、互いに学び、不足を補うことができる。このことは、MGMP インストラクターにとっても有益である。教師研修という場を通じて自分の知識や経験を仲間と共有できるうえ、教育文化省と各地域の教師のつながりを深め、高校日本語教師のネットワークを強化することにつながるからである。総じて、P4TK Bahasa 講師と MGMP インストラクターの有機的な連携は中等教育段階の日本語教育の自立化にとって非常に意味があり、今後の協働の深まりが重要と考えられる。

4. P4TK Bahasa の高校日本語教師研修インストラクター養成の背景

既に見てきたとおり、2010年までの P4TK Bahasa の日本語研修担当講師の教師研修への関与は少なく、彼らの力を研修授業に生かせるようになることがインドネシアの中等教育における日本語教師研修や日本語教育の自立化の課題の一つであった。

そのようななか、2010年6月、P4TK Bahasa によって、同年7月に実施される基礎研修から P4TK Bahasa 講師を出講させることとなった。それにより、P4TK Bahasa 講師とこれまで教師研修で後輩の指導にあたってきた現職の高校日本語教師インストラクターとの連携体制や役割分担について再考する必要性が高まった。同時に、P4TK Bahasa の日本語研修担当講師を高校日本語教師研修のインストラクターとして養成することが緊急の課題となった。

P4TK Bahasa の方針転換以降、本稿が報告する P4TK Bahasa のインストラクター養成研修を経て、P4TK Bahasa の講師たちが実際に基礎研修に出講するまでの過程を、表1に示す。

表1 P4TK Bahasa インストラクター養成研修の背景と位置づけ

2010年6月	P4TK Bahasa の日本語担当講師が基礎研修に出講することとなる
同年6月	翌月の基礎研修に出講する P4TK Bahasa 講師4名を対象とした、教授法勉強会の実施(2日間)
同年7月	P4TK Bahasa 講師4名、基礎研修に出講(於:西スマトラ州パダン)
2011年1～4月	P4TK Bahasa のインストラクター養成研修
2011年6月	P4TK Bahasa 講師3名、基礎研修に出講(於:ジャカルタ)
同年10月	P4TK Bahasa 講師3名、基礎研修に出講(於:ジョグジャカルタ特別州)
2012年2月	P4TK Bahasa 講師5名、基礎研修に出講(於:ジャカルタ)
同年6月	P4TK Bahasa 講師3名、Continuous Professional Development 研修(従来の基礎研修の教授法演習に相当する研修)(於:西ヌサトゥンガラ州ロンボック)

5. P4TK Bahasa の高校日本語教師研修インストラクター養成研修

5.1 研修の概要

本研修は、(1) 基礎研修への出講に必要な教授法の知識と教授力の習得および(2) 現職高校日本語教師のインストラクターと協働できるインストラクターの養成を目標とした研修で

ある。

2011年1月から3月にかけて、2～3日間の教師研修運営に関する内容を取り入れたワークショップ形式の研修を隔週で計6回実施した（研修Ⅰ）後、2011年4月に6名の高校教諭を対象とする5日間の模擬基礎研修（研修Ⅱ）を実施した。

研修対象者は、P4TK Bahasa の日本語研修担当講師（3名）および講師候補（4名）。日本語教育に関する背景については、以下の表2を参照されたい。

表2 研修対象者の背景

No	研修対象者	職階 (登用年)	大学の専攻	JF 訪日研修	基礎研修出講経験
1	A	講師 (1992)	日本語教育	1997短期 2010短期	複数回 (担当科目は1科目のみ)
2	B	講師 (2011)	日本語教育	2007短期	1回
3	C	講師 (2011)	日本語	2008長期	1回
4	D	講師候補 (2005)	日本語教育	2007長期	1回
5	E	講師候補 (2005)	日本語	2007長期	1回
6	F	講師候補 (2010)	日本語教育	未参加	なし
7	G	講師候補 (2010)	日本語	未参加	なし

また、本研修の講師は、JFJ のインドネシア人専任講師、主任講師（日本語上級専門家）、中等教育担当の日本語専門家の3名が担当した。

5.2 研修の特色

本研修の設計にあたっては、「高校での日本語教授経験がなく／乏しく、教育現場の状況にも現職教師ほどには通じていない」という P4TK Bahasa の講師が「半年後に実施される基礎研修の教授法演習に出講できる」ようになることを念頭に置き、次の点を意識した。

- （1）実際の基礎研修に即したワークショップ（研修Ⅰ）とより実践的な模擬基礎研修（研修Ⅱ）を組み合わせ、P4TK Bahasa の講師が基礎研修の教壇に立つうえで必要な考え方や教授力の獲得を目指す。
- （2）短期間で（1）を達成し、教わったことをそのままやるだけではなく自ら考えて研修をつくっていく力が備わるように、「【研修生として】体験する→感じる→考える→【インス

トラクターとして】 やってみる→考える→改善する…」という二つの立場から学ぶ研修にする。

- (3) 基礎研修に出講するためには、それ以上の段階の研修についても理解しておく必要がある。そこで、教師研修全体を概観し、P4TK Bahasa の日本語研修担当講師として把握しておくべき知識やワークショップの実践例などについても、本研修内で触れる。
- (4) 2章、3章でも述べたとおり、現職教師である MGMP インストラクターとの協働の重要性について P4TK Bahasa 講師に考えて意識してもらえるような研修にする。

5.3 研修Ⅰ：教授法ワークショップの実施

研修Ⅰを構成する計6回の教授法ワークショップの概要を、次のページの表3にまとめる。

これらのワークショップは隔週で実施したが、各ワークショップの間には、次のワークショップのための事前課題や、既習内容を今後の基礎研修で教える際に使用するパワーポイント資料の作成を課した。通常の業務を行いながらこれらの課題まで遂行する負担はかなり大きかったと推察されるが、それをやったことによって、教授法ワークショップのすぐ後を追いかける形で、次の「研修Ⅱ：模擬基礎研修」や実際の基礎研修に出講する際の授業準備を進めることが可能となった。さらに、本研修で学んだ P4TK Bahasa 講師の誰もが基礎研修のどの科目でも指導可能という体制づくりの基盤ができた。

5.4 研修Ⅱ：模擬基礎研修の実施

3か月にわたる教授法ワークショップでの学びを経て、P4TK Bahasa の講師は教授法の知識や実践的な指導力をどの程度獲得できたのだろうか。およそ2か月後に迫った実際の基礎研修への出講を前に、講師の指導力や要改善点を把握する目的で、基礎研修のリハーサルと言える研修Ⅱ：模擬基礎研修を設定し、2011年4月4～8日に全5日間の研修を実施した。その概要を表4にまとめる。

模擬基礎研修の設定にあたっては、次の点を工夫し、研修の効果が高まるよう考慮した。

- (1) 基礎研修の教授法演習部分について、実際の基礎研修と同様の内容・スケジュールで行った。それにより、授業をした経験が少ない講師にも、研修の流れや授業の時間配分などを実感しやすくするためである。
- (2) 教師研修開催地域の MGMP や MGMP インストラクターと協働し、上手に役割分担しながら研修を進めていくことを体験的に理解してもらうため、ジャカルタ首都圏地域の MGMP インストラクター1名にも、模擬基礎研修の後半3日間に出講してもらった。授業後の振り返りやフィードバックの際に、現職の教師の立場やこれまでの研修出講経験をふまえた有意義な意見を述べてくれることも期待した。

インドネシアの中等教育における日本語教師研修インストラクターの養成

表3 研修Ⅰ：教授法ワークショップの流れと内容

回	日時	内容
1	1月10日(月)～ 1月12日(水) 9:00～16:00	①教師研修の枠組み ・P4TK Bahasa の各言語の教師研修 ・日本語教師研修(基礎～継続～中級研修) ②基礎研修の教授法演習の概要 ・各科目の目標、概要、流れ、ポイント ・教授法演習の全体の流れと意図 ③地域のインストラクターとの協力 ・この地域のインストラクターは誰？ ・地域のインストラクターと P4TK Bahasa のインストラクター ④教材分析 ・教材分析の目的とシラバスの種類 ・『にほんご』、『さくら』、『インドネシアへようこそ』、 『みんなの日本語』 ⑤年間計画とセメスター計画の作成 ・『さくら』、『にほんご』、『インドネシアへようこそ』
2	1月24日(月)～ 1月26日(水) 9:00～16:00	⑥授業の流れ ・「日本人に対するインドネシア語の授業」(生徒の立場・教師の立場) ・ヒンディー語の体験授業(つながりの良い授業・悪い授業) ⑦モデル授業(1)「モデル授業」とは？ ・「モデル授業」の役割とポイント ・教授項目分析と項目の取捨選択 ・教具・教材作成法 ・模擬授業の教具・教材作成
3	2月7日(月)～ 2月9日(水) 9:00～16:00	⑧モデル授業(2)応用練習 ・「良い応用練習」とは？ ・応用練習の分析(『さくら』などの教科書にある四技能の応用練習) ・応用練習の作成(『さくら』の「話す」応用練習の改善案) ・応用練習のモデル授業(個人模擬授業)
4	2月21日(月)～ 2月23日(水) 9:00～16:00	⑨モデル授業(3)授業の導入～基本練習 ・授業の導入 ・「基本練習」とは？ ・語彙の導入と基本練習 ・文型の導入と基本練習 ・モデル授業(個人模擬授業)
5	3月7日(月)～ 3月9日(水) 9:00～16:00	⑩ファシリテーターワークショップ ・基礎研修の「グループ作業での模擬授業準備」の流れと意図 ・「グループ作業での模擬授業準備」におけるインストラクターの役割 ・ファシリテーターとは何か？ *SL(Situational Leadership)理論 ・ファシリテーションの方法(模擬会議) ・ブレインストーミング体験 ⑪模擬授業評価ワークショップ ・「良い授業」とは？ ・基礎研修の「模擬授業評価票」 ・模擬授業の評価・コメント練習(DVD視聴、5名分)
6	3月21日(月)～ 3月22日(火) 9:00～16:00	⑫試験問題分析・作成ワークショップ ・試験の種類、試験作成時の注意点など ・試験細目表、問題、問題カードの作成と検討(『さくら』16課・17課) ・試験問題(20問)の作成と検討、修正版の作成 ⑬模擬研修の準備

(3) 実際の基礎研修に参加する研修生がどの程度授業を理解し、どのような反応を示すかを見るため、ジャカルタ首都圏地域の基礎研修未修了の教師のなかから希望者を募り、6名に研修生として模擬基礎研修に参加してもらった。また、P4TK Bahasa 講師と MGMP および参加教師の双方にメリットをもたらす研修のあり方を意識して、模擬基礎研修をジャカルタ首都圏地域の MGMP が関わる小研修として位置づけた。

表4 研修Ⅱ：模擬基礎研修の流れと内容

日程	午前 ①07:30~08:15 ②08:15~09:00 ③09:00~09:45 ④10:00~10:45 ⑤10:45~11:30 ⑥11:30~12:15	午後 ⑦14:00~14:45 ⑧14:45~15:30 ⑨16:00~16:45 ⑩16:45~17:30
4 (月)	①ー④教材分析 ・『さくら』の説明と分析：F ・年間計画とセメスター計画 (ワークショップ)：F ⑤ー⑥教材教具作成法：A	⑦教授項目分析 (ワークショップ) ・『さくら』26 課：A ⑧ー⑩教授法演習 1：授業の流れ ・説明、モデル授業・授業分析：G ・モデル授業 (『さくら 2』26 課、60 分)：E
5 (火)	①ー⑥教授法演習 3：導入・基本練習 ＜語彙の導入・基本練習＞ ①説明：G ②③モデル授業＋討議 ・モデル授業：E ・討議ファシリテーター：G ＜文型の導入・基本練習＞ ④説明：G ⑤⑥モデル授業＋討議 ・モデル授業：E ・討議ファシリテーター：G	⑦ー⑩教授法演習 4：応用練習 モデル授業＋討議 ・4 種類の「話す」応用練習の説明：C ・モデル授業 (『さくら 2』26 課、 インタビュー、20 分)：E ・討議ファシリテーター：C ・モデル授業 (『さくら 1』9 課、 インフォメーション・ギャップ、20 分)：D ・討議ファシリテーター：C
6 (水)	①ー③教授法演習 4：応用練習 モデル授業＋討議 ・モデル授業 (『さくら 2』27 課、 ゲーム、20 分)：B ・討議ファシリテーター：D モデル授業＋討議 ・モデル授業 (『さくら 3』51 課、 ロールプレイ、20 分)：C ・討議ファシリテーター：D ④ー⑥試験・評価 ・説明：B	⑦ー⑩教授法演習 5：実習準備 (教授項目分析→グループディスカッション →グループ練習→教案作成) ◆グループ 1：31 課「なんがいにありますか」 (インフォメーション・ギャップ) ◆グループ 2：32 課「コーラはありますか」 (ロールプレイ) ◆グループ 3：39 課「どんながいこくが できますか」(インタビュー)
7 (木)	①ー⑥教授法演習 5：実習準備 (教案作成、教具作成、グループ練習)	⑦ー⑩教授法演習 5：実習準備 (グループ練習)
8 (金)	①ー⑤教授法演習 5：実習 (4 人) 【流れ】 1 人目：7:30~8:15 2 人目：8:20~9:05 フィードバック(1)：9:05~9:30 休憩：9:30~9:45 3 人目：9:45~10:30 4 人目：10:35~11:20 フィードバック(2)：11:20~11:45	⑦ー⑧教授法演習 5：実習 (2 人) 【流れ】 5 人目：13:45~14:30 6 人目：14:35~15:20 フィードバック(3)：15:20~15:45 休憩・お祈り：15:45~16:15 ⑨教授法演習 5：実習フィードバック：H ⑩まとめ：H 閉講式：A ・MGMP 小研修修了書授与：I
	※金曜日の午前中は、お祈りの関係上、⑤時間目ごろ (11:30 ごろ) まで。	

* 表中の A・B・C・D・E・F・G は P4TK Bahasa 講師。H は JFJ 講師。I はジャカルタ首都圏地域の MGMP インストラクター。

また、模擬研修期間中、毎日、研修終了後に、P4TK Bahasa 講師 7 名と JFJ 講師 3 名によるインストラクター・ミーティングを実施した。最終日の研修終了後には、P4TK Bahasa 講師 7 名、MGMP インストラクター 1 名、JFJ 講師 3 名による振り返りとフィードバックを行った。

6. インストラクター養成研修の評価

6.1 研修修了時の評価

本インストラクター養成研修（以下、「研修」）は、P4TK Bahasa 講師が基礎研修において、教授法演習のインストラクターとして現職高校日本語教師を指導し、各地域の MGMP インストラクターと協働して基礎研修を実施できるようになることを目指して行われた。これらの目標はどの程度達成できたのであろうか。また、研修実施前と研修実施後で、P4TK Bahasa 講師はどのように変わったのであろうか。本章では、研修中の観察と研修後に実施した振り返りとインタビューでの P4TK Bahasa 講師の発言や観察結果から見た講師のパフォーマンスや考えの変化に基づき、研修の評価を試みる。

【研修修了後の振り返り】

研修修了後の P4TK Bahasa 講師による振り返りでは、次のようなことが明らかになった。

- (1) 5名の講師は、「新しいことがわかるようになった」「前よりも詳しくわかるようになった」と述べた。特に、これまで「教材・教具論」だけを研修で教えていたベテランの講師は、「年間計画・セメスター計画が難しかった」「教材項目分析が新しかった」と述べ、今まで教えたことがなかった科目について新しい学びを得たことを率直に述べていた。彼らは、この研修について、難しいところや十分でないところもあったが、研修の中で教授法について新しいことを学んだり、以前はよくわからなかったことについて理解を深めることができたと捉えていた。（知識の習得）
- (2) 1名の講師は、「今まで教案をちゃんと作っていなかった」と述べた。研修を通じて以前の自分の授業実践を振り返り、自身の改善点を明確化していた。（自身の内省）
- (3) 1名の講師は、「自分は教えた経験がないので、もっと現場を知りたい」「高校で教えられるように上司から許可を得たい」と述べた。研修を通じて、高校の現場での教授経験の重要性を意識し、さらに実際に高校で日本語を教える機会を得たいという希望を持つようになったことを示した。（教授実践の経験を積むことへの意欲）

【研修修了後の評価】

一方、研修修了後、報告者らは P4TK Bahasa 講師のパフォーマンスを次のように評価した。

- (1) 研修での講義やワークショップを通して学んだ教授項目について、P4TK Bahasa 講師は模擬基礎研修において、学んだことを自分なりに消化して、自分の言葉で説明して研修生（模擬研修の受講生）に伝えていた。また、メンターとして、研修生の模擬授業準備と模擬授業本番で適切な指導やフィードバックをしたり、研修を通して、研修生の学びが進むように、研修生への働きかけやモラルサポートをしたりした。全体的に、研修で学んだことが模擬基礎研修での実践に活用されており、研修の成果が見られた。（基礎研修のインストラクターとして必要最小限の知識と技術の習得と実践への応用）

(2) 模擬基礎研修のワークショップの中で、研修生から意見を引き出してそれを全体のディスカッションにつなげていくファシリテーターの仕事が P4TK Bahasa 講師にとって特に難しそうであった。ワークショップのファシリテーターとしての技能を高めることが今後の課題である。この課題の克服のためには、基礎研修の講師としての経験を積むとともに、実際に高校での日本語教授経験を積み、研修に参加する高校教師の現場の実情や彼らが抱えている問題について理解を深めることが重要だと考えられる。また、基礎研修のインストラクターには、モデル授業や講義・ワークショップで適切な日本語使用のモデルを研修生に示す能力も求められるが、その点において不十分なところが散見され、今後日本語の運用能力のさらなる向上が必要であると考ええる。(基礎研修のインストラクターとして今後技能向上すべき課題)

研修修了時の評価をまとめると、次のようなことが言えよう。(1) 本研修の目的であった「基礎研修の出講に必要な知識と教授力の習得」に関しては、ファシリテーターの技能など今後改善すべき課題も残ったものの、インストラクターとして必要な基本的な知識と技能は習得でき、一定の目標は達成できた。(2) 本研修を通して、P4TK Bahasa 講師は、教師としての自分の授業実践を内省したり、自分の教授経験不足を自覚して、高校で実際に教える経験を積みみたいと希望したりするなど、教師としての自分自身を振り返り、気づきを得た。(3) 本研修のもう一つの目標の「現職高校日本語教師のインストラクターとの協働ができるインストラクターの養成」については、P4TK Bahasa 講師自身がインストラクターとの協働について直接言及することはなかったが、基礎研修の内容と高校の実際の日本語授業の強い関連性と高校の現場での教授経験の重要性を理解したという発言から、間接的に、彼らが自分たちの力の限界と MGMP インストラクターの果たしている役割を認識したことがうかがえる。

6.2 高校日本語教師研修出講後の評価

2011年4月8日に研修を修了した後、5名の P4TK Bahasa 講師が、その後2011年6月から2012年6月までの間に1～4回高校日本語教師研修(基礎研修)にインストラクターとして出講する機会を得た。その内、4名に対して実際の研修出講後の2012年8月1日にインタビューを実施した。4名の P4TK Bahasa 講師が、複数回の研修出講の経験をした後で、研修時と現時点の自分自身を比べてどのように自己評価しているのかを以下に記す。

(1) 自分が持っている授業のイメージについて、研修の前と後で変わったこと

4名とも研修の前と後で授業のイメージについて変化があったと回答した。

研修前に教授経験が乏しく教授法についての知識や授業の明確なイメージがなかった3名の講師は、研修に参加することによって、教える経験と自分の授業について内省する機会を持ち、授業の具体的なイメージをつかむことができた。

1名はもともと教育大学出身で教授法の知識と教授経験があったが、高校教師研修の授業で教えるためには、今までの知識と経験では不十分で、研修生のニーズに合わせた授業ができるような技能が必要だということが理解できたし、また、この研修では実際の基礎研修に近い形でその準備ができたと答えた。（授業のイメージの明確化）

（2）教師の役割

3名の講師が教師の役割についての考え方が変わったと答えた。彼らが研修の前に抱いていた教師の役割は「学習者に知識を伝達すること」であったが、研修の後、教師の役割は「知識伝達」に加えて、「クラスによって求められる様々なニーズに応じて、学習者や授業の方法について考え、行動すること」も必要だと考えるようになった。特に、基礎研修で研修生の高校教師に対して教える際には、「参加者自身が自ら考えて変わることを促すような授業をする」必要があると感じた。（「知識伝達者としての教師」から「多様な役割を果たす教師」へ）

（3）研修で学習者の立場から感じたこと

2名の講師が、学習者の立場を経験することで、教師としての自分の行動を内省し、それを今後高校教師研修の授業に活かしたいと答えた一方で、他の2名は、この研修や高校教師研修の模擬授業は実際の高校の授業とは違うので、研修を通して実際の高校の授業の問題を理解することは難しいと答えた。（自身の授業行動の内省、高校の授業現場の問題理解の難しさの認識）

（4）研修の中で自分の担当した授業に役に立った部分と足りなかった部分

3名が研修の科目全部が役に立ったと回答した。一方、足りなかった部分として全員から、日本語能力向上のための内容と、試験問題作成・評価の授業時間という回答があった。また、実際の高校の現場がわからないので、シラバス・カリキュラム作成の授業に自信がないという意見もあった。（自身の授業経験不足や能力不足を感じている部分についての補強研修の希望）

（5）基礎研修で教えてみて、自信がある授業と自信がない授業

自信のある授業は「授業の流れ」と答えた人が2名で、理由はディスカッションが多いということといろいろ話せるということが挙げられた。自信がない授業としては、2名が「年間・semester計画作成」を挙げ、理由として実際の高校での授業経験が乏しいということを挙げた。また、2名は「授業の流れ」を自信がないとし、その理由として、授業の時間が長く集中が難しいということと、現職教師である研修生のほうが教授経験が豊富なので、授業の流れを教えるのはやりにくいと答えた。（高校での教授経験が必要な科目を教えることへの自信のなさ）

（6）高校教師研修に MGMP インストラクターが必要か

全員必要だと答えた。理由は次のようなものである。① P4TK Bahasa 講師は高校の現場を知らない。②モデル授業は教授経験が豊富な MGMP インストラクターが教えたほうがいい。そ

れと同時に、MGMP インストラクターがモデル授業をする場合も、事前に授業について P4TK Bahasa 講師と打ち合わせが必要だという意見が2名から出た。(実際の高校での授業経験が重要な科目での MGMP インストラクターの必要性、MGMP インストラクターと P4TK Bahasa 講師の連携の必要性)

(7) 今後の研修で勉強したいこと

複数名が希望した項目：四技能の教え方、評価、日本語、クラスルームアクションリサーチ、授業研究、異文化理解。その他の項目：学習モデルのいろいろ、project based learning、教材分析、日本語の教え方、日本語の研修授業のコースデザイン、カリキュラム。(幅広い分野についての研修の意欲)

6.3 総括

6章1節と2節に示したように、P4TK Bahasa 講師は研修を通してインストラクターとして必要な知識と技術を得ただけでなく、教師としてのこれまでの自分自身の実践を内省して授業や学習者について理解を深めたことがわかる。彼らは、研修後、日本語教師およびインストラクターとして必要な専門性を深め、自信を得た一方で、高校での教授経験不足の課題も認識し、高校現場での教授経験を増やしたいという意欲をもつようになった。また、研修において、高校現場での教授経験の豊富な MGMP インストラクターとの協働が重要であることを認識したことも明らかになった。本研修が、P4TK Bahasa 講師が日本語教師研修インストラクターとして成長するのを促したと言えるのではないか。

インドネシアの中等教育における日本語教育の自立化という観点から見ると、この研修が実施されたことは大きな意義を持っている。前述したように、JFJ は P4TK Bahasa と共催で高校日本語教師研修を実施し、研修の中のインドネシア人講師の授業担当を徐々に導入し、研修の自立化を図ってきたが、P4TK Bahasa 講師が研修インストラクターとして授業を担当するところまでには至っていなかった。それが、2010年6月の P4TK Bahasa 講師の研修出講決定によって、研修のさらなる自立化が動き出すことになったのである。

P4TK Bahasa 講師の養成が教師研修の自立化を前進させた一方で、これまで研修において大きな役割を果たしてきた MGMP インストラクターが今後の研修にどのような形で関わることになるのか、MGMP インストラクターと P4TK Bahasa 講師が、どのように役割分担し、どのように連携をしていけばいいのかということが重要な課題となってくる。これまで高校教師研修で MGMP インストラクターが担ってきた授業を今後 P4TK Bahasa 講師が多く担当するようになると、MGMP インストラクターの活躍の場が少なくなるため、彼らのインストラクターとしての技能も維持し、生かしていけるように心がける必要があるだろう。

7. 今後の課題

最後に、本研修を終えての今後の課題を述べる。

(1) P4TK Bahasa 講師のさらなる技術向上と教授経験蓄積の必要性

本研修はあくまで、高校日本語講師研修で最低限必要なインストラクター技能習得を目標にしたものであり、今後も P4TK Bahasa 講師のさらなる研修が必要である。同時に、彼らが高校の日本語のクラスで実際に教える経験を数多く積んでいくことも非常に重要である。そのためには、P4TK Bahasa の中で、それができそうな仕組みを作ることが望まれる。

(2) インストラクター養成研修の成果の活用

7名の P4TK Bahasa 講師が本研修を修了したが、その後、7名の内、2名はまだ研修を担当していないなど、インストラクター研修の成果がその後の教師研修に活かされていない。今後研修の成果をぜひ教師研修に還元していくことが望まれる。

(3) MGMP インストラクターとの連携の問題

2012年1月に P4TK Bahasa は新しい研修の形態を打ち出し、研修の講師を基本的に P4TK Bahasa 講師が務め、MGMP インストラクターは関わらないということになった。JFJ が P4TK Bahasa と引き続き共同で教師研修を行っていくということは JFJ と P4TK Bahasa との間で確認されており、JFJ の講師が何らかの形で今後も研修に関わることにの変更がない。しかし、一番懸念されるのは、6章3節にも述べたように、MGMP インストラクターへの研鑽の場がなくなることで、それによって、MGMP インストラクターと P4TK Bahasa インストラクターが有機的に連携して教師研修を進めるというやり方ができなくなるということである。

MGMP インストラクターは、JF がこれまで長年にわたって、多くの地域に日本語専門家を送り、育成してきた地域の中核教師であり、彼らはインドネシアの中等教育における日本語教師の人材育成や地域の日本語教育の質の向上の鍵となる人たちである。MGMP インストラクターが今後も地域の日本語教育をしっかりと担っていけるように、高校日本語教師研修に MGMP インストラクターが引き続き関わっていける方法を提言していく必要がある。

(4) JFJ と P4TK Bahasa の連携のあり方

高校日本語教師研修は P4TK Bahasa と JFJ の共催となっているが、実際には、P4TK Bahasa の枠組みの中で行う研修に、JFJ が研修の中身の日本語教育に関するノウハウやリソースを提供するという形であるので、P4TK Bahasa の研修の枠組みや研修の方針や個別の研修の計画などを策定する段階から JFJ が関与できるわけではない。しかし、教師研修がインドネシアの中等教育の日本語全体の中でより有意義に活かされていくように、教師研修を長期的にどのように計画し実施していくのか、P4TK Bahasa と JFJ との両者が、インドネシアの日本語教育の自立化と発展という同じ目標を持つパートナーとして、共に考え、協働していく必要があるだろう。

このように、多くの課題も残っているが、P4TK Bahasa 講師が日本語教師研修でインストラクターを務められるようになったことは、研修の現地化、自立化という意味で一步前進である。インドネシアの中等教育の日本語教育を支える高校日本語教師の研修が、自立化とともに質的にも充実していくために、P4TK Bahasa 講師と JFJ 講師、MGMP インストラクターが有機的に連携することがこれからますます重要になってくるであろう。

〔注〕

^①P4TK Bahasa には2004年まで1名しか日本語研修担当講師がおらず、2005年以降に7名の日本語研修担当講師候補が採用された後も、P4TK Bahasa 内の事情で7名の日本語研修担当講師候補が授業を担当することはなかった。

^②2012年9月現在、中等教育担当の日本語専門家が常駐するのはジャカルタ首都圏地域と中部ジャワ州の2地域のみ。他地域については巡回訪問型の中等教育担当日本語専門家が支援を行っている。

〔参考文献〕

国際交流基金ジャカルタ日本文化センター・インドネシア教育文化省語学教員研修所 (2011)『研修用教授法教材 (日本語版)』(未刊行資料)

Drs. Sudjianto, M. Hum. ・小林佳代子 (2004)「インドネシアの高等学校における日本語教育のカリキュラム」『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』第7号、59-70、国際交流基金

藤長かおる・古川嘉子・エフィ ルシアナ (2006)「インドネシアの高校日本語教師の成長を支援する教師研修プログラム」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、81-96、国際交流基金